

Title	ヴァレリ・モラン 第十六世紀のメードストーンに対する亡命新教徒の定住
Sub Title	Valerie Morant, "The settlement of Protestant refugees in Maidstone during the Sixteenth century"
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.11 (1952. 11) ,p.811(73)- 813(75)
JaLC DOI	10.14991/001.19521101-0073
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19521101-0073">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19521101-0073</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論文紹介

ワレン・C・スコヴィル

『少数者の移住と技術の普及』

(Warren C. Scoville, "Minority Migrations and the Diffusion of Technology", Journal of Economic History Vol. 11 No. 4 Fall pp. 347-360)

技術の變化は一體如何なる経過を辿るものか。通常この過程は發明・採用そして普及という三つの段階に分割されるが、最後の普及の過程に關しては從來少しも知られていないから、技術が普及して行つた状況を検討して見たい。この場合外國職人の招聘に依つて新技術が移入され、又時には旅行者が外國技術の導入に貢献したこともあつたが、然し迫害を避けて亡命した新教徒が技術の傳播において果たした役割には遠く及ばなかつたから、新教徒が媒介した二つの場合について技術發展の経過を示すことにする。

一五八五年にアントワープが陥落したが、これは北ネーザerlandにとつて劃期的な出來事であつた。スペインの重壓を避けて新教徒はポランダ、ジランダの二地方へ移住し、かくして州内の各地に早くも毛織物生産の展開を見た。特にアムステルダム、ロッテルダム、ハーレム及びユトレヒトの繁榮が目

覺しく、前貸制に依つて新種の毛織物が大量に生産されるようになったが、オランダ以外の諸地方に亡命した新教徒の活動に關しても亦刮目すべきものがあつた。

例えばイギリスに來住した新教徒についてであるが、亡命者はロンドンに約一萬人、ノーリッチに四千人から六千人、ユルチェスターに約千三百人といつた具合に大舉して來住し、又サントドウィッチ、カンターベリー、サザンプトンその他にも多く娈集して爾後の經濟發展における重要な指導者となつたのであつた。イギリスに幾個もの梭を持つ複雑な織機を紹介したのは實にこの新教徒であり、又仕上や染色の設備が完成されて、毛織物が未仕上の儘で輸出されなくなつたのも同じ新教徒の重大な功績の一つに屬したのである。移住者は多く同職組合の束縛を避けて農村に進出し、同職組合が許可した數を相當に上廻る大量の職人を前貸制に依つて統率し、薄手の毛織物の生産に乗出したばかりではない。この人々が傳えた生絲を繰る新方法はイギリスにおいて早くも實用に供され、絹織物の生産が急速に進展し、例えばロンドンにおいては在來の毛織物や麻織物の生産を壓倒する程であつたし、又メードストーンは縫絲の産出地として著名となり、バインステイブルやデボンシャーにおいてはアントワープから輸入した絹絲を材料とする上質レースが盛んに製造されるようになった。亡命者はこのほかに窓ガラスやガラス製品の工場をも創設し、又製紙技術の向上に資すること多大であつた。イギリスにおける金屬工業の發展に對する亡命

者の功績は無視し難いし、又多くの寶石職人の來住を機に貴金屬の細工技術も大いに進歩した。尙農業に對する貢獻については肥料の使用が教示されて生産が増大しただけではない。亡命者に依つて新種の根菜や野菜が紹介された程であり、技術の進歩に對する亡命新教徒の寄與はイギリス一國について見ても實に華々しくもあり又かくも多方面に亘つていたのであつた。

迫害を避けて國外に散住したユグノー教徒も亦技術の傳播に貢獻した重要な他の一團であつた。亡命者は高度な技術を移住先において活用し、かくして亡命者の散住した如何なる地域においても技術の顯著な發展を見た。一六八五年のナント勅令廢止はフランス經濟を相當に衰退させたが、他面において技術の廣範な普及というかかる大きな結果を伴つたのであつた。

例えば、ドイツの各地に散住した亡命者がフランスにおいて早くから著名であつたあらゆる種類の工業生産を開始していった。亡命者はドイツの諸都市に絹織物工場を創設したし、またこの國におけるリボン・手袋・レース・毛や絹の靴下・フェルト帽・敷物等の製造の開始も同じ亡命者に纏わる重要な功績の一部であつた。選舉侯も亦フランスからの亡命者に對し絶大な援助を與え、經濟活動に對する支援は三十年戦争に依る荒廢が甚だしかつた南ドイツにおいてとくに強力であつたが、亡命者の大部分が農民であつたため、工業發展の萌芽が見られても、その後における経過は必ずしも順調なものではなかつた。寧ろドイツの場合、亡命新教徒に依る影響は農業面において一層著し

く、新教徒の來住を機に耕地は擴大し、桑・煙草・薔・アスパラガス・花キャベツ・馬鈴薯・高級果樹・大青等が紹介されてドイツ農業は好況を迎えることが出來たのであつた。

亡命者の導入に依つてイギリスも亦多大の影響を蒙つた。早くもロンドンやカンターベリーにはツール・リヨン・ニームの絹織物職人が來住し、ダマスカス緞子・琥珀織・金襴・波紋布・縞子・絹天等が出來るようになった。イプスウィッチにおいては帆布が作られ、冠ガラスや板ガラスの工場が増設された。キャラコ擦染法・良質紙の製法も同時に傳わり、當時イギリスにおいてはフランスの技術が非常に尊重され、フランス語の名入がなければ何も賣ることが出來ない」程であつたのである。

(渡邊國廣)

ヴァレリ・モラン

『第十六世紀のメードストーンに對する』

亡命新教徒の定住』

(Valerie Morant, "The Settlement of Protestant Refugees in Maidstone during the Sixteenth Century", Economic History Review Second Series, Vol. IV, No. 2, 1951, pp. 210-214)

スペイン王フィリップ二世の迫害を避けてネーザerlandの新教徒は大舉各地に散住した。これ等の亡命者は一般にリンネ

ル、絹織物、薄手の毛織物、皮製品、紙、マイル、煉瓦、武器、火薬等の製造に堪能な人々であり、厄介な關入者と呼ばれ、手強い競争者と看做され一部から敵視されながらも、とにかく亡命した先々において經濟の發展に貢獻するところ大であつた。

海を越えて逃避した新教徒の場合も幸いにしてノーリッチ、コルチエスター、サザンプトン、カンターベリー、メードストンの各都市を始め、ドーヴァー、サンドウィッチ、ヘスチングス、ロムニー、ハイスの五要港に居住することを許された。優秀な技術の持ち主であつたこれ等の亡命者は上述した諸都市のいづれに對しても重大な影響を及ぼしたが、果して亡命新教徒が演じた役割には實際如何なるものがあつたというのであろうか。特にケント州メードストーンの場合は如何。

一五六七年六月にメードストーン市長は亡命新教徒の招聘を申し出た。そして特にセイ「サージ」、モカドラー「安物のビロード」、グログレイン「カムレット」「粗織の布」、ヤルツセル「縞子の一種」の製造者・ディアパー「縞織のリンネル布」、綾織やリンネルの布、袋布、スタメット「毛織物の一種」、ペイ「上等な薄手の毛織物」、フリサドラー「少しも知られていない上質もの」、フランダーズの毛織物、羽根入の敷蒲團を包む丈夫な布、アラス織の壁掛や綴織の掛布の織工・眞鍮細工師・スペイン草、フランダーズの壘、鋪瓦や煉瓦、白色の上質紙や褐色の粗紙、婦人用胴着や頭巾及びあらゆる種類の武器や火薬の製法に經驗ある者「一般の利益のために必要でも有用でもあるが、そこら

では知られていない多くの他の技術や知識」を持つ人々を希望して來た。かくしてロンドンに先ず落着いた者のうちから使用人を含め一世帯最高十二人を越えない三十家族が許されて早くも一五六八年にはメードストーンに來住し、主として東フランダーズのニール、ディンズ、ガンの出身者であつたこれ等の技術者は一五八五年には四十三家族百十五人に増加し、ウィク街を中心として旺盛な經濟活動に従事していたのであつた。來住者の大部分はメードストーンにおいても毛織物や絹織物の製造者であつた。袋布、ペイ、グログレインが一五六八年には既にメードストーンの定期市において小賣され、又一五六九年にはグログレイン、モカドラー、袋布、毛織物がこの都市において實際に生産されるようになっていた。これ等は新型の織物として知られたが、市場において販賣される前に亡命者の間から任命された検査官の審査を受けなければならない規定があり、その手数料として袋布一反に附いて一片、大幅の毛織物、グログレイン各一反に附き四片、ペイ一反に附いて同じく四片の割合で業者から徴收された金額の全部がその儘この都市の有力な財源となり、従つて財政的收入の面に對する寄與においてこれ等の亡命者が果たした役割は相當に大であつたと見なければならぬであらう。

これ等の亡命者の影響は然し單に經濟的な面において認められたというだけではなかつた。優秀な技術者として最初から尊重されて住居の保證をすら得ていたこれ等の亡命者は同時に有

能な教師となりこの都市の人々のための技術指導に當らなければならなかつたし、又熟練を要しない仕事に對しては貧困者を充當することが強要されていた。かくして來住者は「紡がせたり他の仕事に使つたりしたことのために貧乏な人々にとつて非常な助けとなり」怠惰をかなり除いたり遠ざけたりしている」のであつた。「大人しくて有爲な外國人」はかくしてこの都市の氣風の刷新に貢獻し、曩の財政面における寄與と並んでかかる面に對する影響も見出し難い役割の一つというべきであらう。

亡命者はメードストーンにおいてかくも勢力があつたが、ケント州に來住した織物業者がジェイム一世の壓迫から國外に退散するに及んでメードストーンの新教徒も再度の移住を餘儀なくされた。かくして從來迄亡命者の掌握するところであつた織物生産はこの都市に居住する「王國生れの臣民」の手に移つて行つたが、亡命者の下において習得した未熟な技術を以てしてはその維持も困難な程であつて、織物生産の主要な部分は一六二〇年迄には完全に没落してしまつていた。但し「外國生れやその子弟」を含めても當時僅かに二十三人に過ぎなかつたという殘留者の大部分がメードストーンの縫絲生産を依然として獨占し、熟練を要しない仕事に土着の人々を使用した以外は生産の實際面に直接關係してはいたから、メードストーンの縫絲生産においてこれ等の外國人が果してはいた役割は相當に根強く、メードストーンの縫絲が「オランダ人の品物」と呼ばれたのも決して偶然なことではなかつたのであつた。(渡邊國廣)

W・H・ホスフォード

『第十七世紀の圍牆に關する「目撃者の報告」』  
〔W. H. Hosford, "An Eye-Witness's Account of a Seventeenth-Century Enclosure,"  
Economic History Review, Second Series,  
Vol. IV, No. 2, 1951, pp. 215-220〕

圍牆に關しては當事者の書いた記録が残つていない。幸い發見された「目撃者の報告」に依つてケイソープ(イングラント東部の一村)における圍牆の實情を知ることが出來たが、貴重なこの記録の發見は、第十八世紀において寧ろ普通に見られた牧羊のため以外の圍牆の非常に早い實例を傳えているという意味においても正に有意義な發見であつたのである。

圍牆を懸念に主張したのは「主だつた自由土地保有者」であつた。即ち「苦勞や負擔、それと耕作に依る農業の方法に纏わる他の酷い苦痛を嫌がつて、又は主として自分等の土地を改良しようという期待から」圍牆を煽動したのであり、「強力で反對するための金銭も勇氣も持たなかつた」中以下の結局これに追従する以外になかつた。自分等が「家族を扶養することが出來たのは單に農園や小屋に依つたばかりでなく、勞働や存分にあつた仕事にも依つたが、圍牆のためこの仕事も一緒に暮す楽しみもなくなくなるに違ひない」反對者のかかる酷い落膽にも拘わらず「計畫を遂行するためあらゆる面でも恵まれた」主張者に